「オートサービスショー2019」レポート①

高まり見せるエーミングへの関心

～次世代へ　変わるクルマと自動車整備～

日本自動車機械工具協会（機工協）・主催による「第36回オートサービスショー2019」は5月16日～18日の3日間、東京ビッグサイト・青海展示棟で開催した。「オートサービスショー」は、1948（昭和23）年に「自動車整備用機械工具実演展示会」として第1回を開催。その後、1973（昭和48）年に現在の名称に変更し、隔年で開催してきている。今回のショーテーマは「次世代へ　変わるクルマと自動車整備」。タイヤ整備機器をはじめ、自動車用の整備・検査機器、機械器具・工具など自動車関連整備事業所で使われる整備関連製品が一堂に展示された。

自動車整備機器類の専門見本市として国内最大規模を誇る「オートサービスショー」。今回は103社8団体が参加し、全860小間の規模となった。その中にはタイヤ販売店で使用されるタイヤ整備機器・工具を出展した企業も多数含まれている。小野谷機工、モビリティープラス、空研、東洋精器工業、エイワがそれらだ。オートサービスショー特集第1弾として本号で各社ブースをリポートする。

また、アルティア、安全自動車、イヤサカ、興和精機、サンコー、バンザイ、ユーコー・コーポレーションなどがタイヤチェンジャーやホイールバランサー、アライメントテスターの新製品を出展。さらにスギヤス、埼玉精機、信濃機販、東空販売、東日製作所、エムケー精工がリフトやエアーツール、トルクレンチ、タイヤ空気充てん機などを出展した。第2弾として次号でリポートする予定。

小野谷機工

今回のショーで特に注目を集めたのがエーミング（機能調整）作業関連。安全性と快適性の向上を図るASV（先進安全自動車）車両の普及が進み、それにともないエーミング作業の需要が急増。エーミング作業にはタイヤ空気圧の調整をはじめホイールアライメントの測定・調整作業が付随することから、各社ともにそれに関連する新製品を積極的に出展。対応を強めている。

◇

小野谷機工（福井県越前市、三村健二社長）

今回は「タイヤを組む」が展示テーマ。「たったひと押し、あなたもプロ気分」のサブタイトルが示すように、オートマチックタイプのタイヤ整備機器を参考出品し、省人化と作業の軽労化への対応施策を提案した。

その代表がPCオートチェンジャー「EasyRobo PCⅢ」（イージーロボ　ピーシースリー）だ。タイヤのリフトアップからチェンジング作業、リフトダウンまで完全なフルオート作業を実現。「13インチ～18インチのPCタイヤ脱着にターゲットを絞り、機器を開発した」と、川崎雅彦販売促進部長は紹介する。

また、PCオートマチック式ホイールバランサー「EasyRobo BCⅡ」や、LTタイヤ専用チェンジャー「ライトスター　LS－175W」など、参考出品モデルをはじめ、今後上市予定の新製品を多数発表した。

「第36回オートサービスショー2019」開催初日の16日には関係省庁・関係団体から来賓を迎え開会式が行われた。

オートサービスショー開会式

柳田会長「車の発展担う」

冒頭、日本自動車機械工具協会の柳田昌宏会長は「オートサービスショーはモータリゼーションの普及と技術の進歩とともに、自動車のアフターサービスを支えるわが国機械工具の技術レベルを示す重要な役割を担ってきている」と挨拶。その上で「自動運転の実現などクルマの高度化が進むに連れ、これまで以上に点検整備需要が拡大するという見方がある。今回のオートサービスショーでは今後のモビリティ社会の革新を担う各企業が様々な最新技術をご提案するステージを用意した。近未来のクルマ社会の発展の一翼を担えるよう、技術革新に取り組んでいきたい」と語った。